

【Khaṇḍana bhava-bandhana】解説⑥

ヴァーンチャナ カーマ カーンチャナ アティ ニーンディタ インドゥリヤ ラーグ
6. Vañchana kāma-kāñchana ati- nindita indriya- rāg
避ける 肉欲 お金 すべての 良くない 感覚 執着

ティヤーギーシャーラ ヘ ナラ ヴァーラ デハ パデ オヌラーグ
Tyāgīshvara he nara- vara (×2) deha pade anurāg
一番放棄した人 おお！ 人 一番高貴な 与えてください 足 愛

<賛歌集の訳>

あなたの祝福された御足に対する、確固たる愛を与え給え。
全ての放棄者の主、人類の最も高貴な者の主よ。
あなたは快樂と欲望の征服者、官能の誘惑を完全に拒絶する方。

<内容>

肉欲と金、五感から生じるすべての執着を完全に放棄したお方。
おお！あなたは最高に放棄した方、人の中で一番高貴なお方。
我々に、あなたの御足に対する深い愛を与えてください。

<語句解説>

Vañchana : 放棄する。避ける。(語源は「奪い取る」)

Kāma : ※1. 肉欲

Kāñchana : お金、財産。転じて貪欲。(語源は「ゴールド」)

ati : すべての

nindita : ※2. 良くない。(語源は「批判したもの」)

indriya : ※3. 感覚。感覚の対象。五感から生じるすべての感覚の欲望

rāg : ※4. rāga 執着。

Tyāgīshvara : ※5. Tyāga (放棄) + īshvara (一番できる人)

he : おお！

nara : 人

vara : 一番高い、高貴な

deha : 与えてください (動詞) ※名詞の場合は「体」と訳す

pade : 語幹は pada (足)。複数形で pade。この場合は神様の人格

anurāg : ※6. 神に対する深い愛

<注釈>

※1. Kāma カーマ：肉欲

シュリー・ラーマクリシュナがいつも言っておられた「カミニ・カンチャナ」は「女と金」。カミニはこのカーマの女性形。

「女性」と言っていたのは単にシンボルだけで、総称して「肉欲」という意味。福音では **women and gold** と表現されているが、当時は男女が同席することはほとんどなく、シュリー・ラーマクリシュナの弟子は男性が多かったので女性と表現していた。霊的に生活する上でこの肉欲に気を付けなければいけない。

※2. **nindita**：良くない。語源は「批判したもの」で、シュリー・ラーマクリシュナや聖典が批判しているものの事。例えば **Kāma**（肉欲）、**Kāñchana**（お金）。これらは普通の人には構わないが、求道者のために、霊的な実践をする人にとって良くないという意味。

※3. **indriya**：感覚。感覚の対象。

Chakshu-Indriya（チャクシュ・インドゥリヤ）：目の感覚

Deha：肉体的

Prana：生命エネルギー

Indriya：感覚。

カルマ・インドゥリヤ（働きの感覚）

ギャーナ・インドゥリヤ（知識・認識の感覚）がある。

五官（目、耳、鼻、口、皮膚）から生じる五感への執着

口の感覚の執着：食べ過ぎ、飲みすぎ

目の感覚の執着：映画、きれいな風景などもっとたくさん見たい

耳の感覚の執着：もっと音楽を聴きたい

五感の執着が強いといつも求めてしまい、欲望が満たされないと悲しむので、すべての感覚をコントロールしなければいけない。

他の感覚を制御できても1つの感覚でも執着が残っていると、死にます。

<バーガヴァタムから「アヴァドゥータの24の先生」の話>

シカは美しい音が大好きで、それを知っている獵師がフルートを吹いていると、シカは知らずに「もっと美しい音が聞きたい」と音の方にやってきてしまい、獵師がしかけた罠にかかるという話。このようにたった1つでも感覚の執着があると死にます。

もう一つは、像は触るのが大好きな像の話。獵師はそれを知っているので、新しい像を捕らえるために、雌の像をペットにし、その像をおとりに使って罠をしかけた。雄の像はおとりの雌の像を見てすぐ触りたくなったので追いかけてついてくると、落とし穴にはまって捕らえられたという話。

鼻の感覚の例ではミツバチの話。ミツバチは花の蜜が大好きなので、ハスの花に寄ってきて蜜を吸うが、夕方になると花がしぼむのを忘れて夢中になって吸ってしまい、出られなくなって死んでしまう。

このように、たった1つの感覚の執着が、どのようにわれわれを困らせ、執着させるかという話が「アヴァドゥータの24の先生」には書かれてある。

肉欲ばかりではなく、他の感覚もすべてに気を付けなければいけない。

※4.rāga : 執着

rāga は「執着、好き、愛」という意味だが、同じ rāga でも、世俗的な愛に向けるか靈的な愛に向けるかで変わってくる。

indriya (感覚) に向けると indriya-rāg となり、五感への執着なので良くない。

Anurāg は神への愛なので良い。

※5. Īshvara : 神、持ち主、など前後関係で意味がいろいろあるが、この場合は「~できる人」と訳す。つまり「一番放棄できる人」という意味。

例えば

ダナ (富) + イシュワラ = ダネッシュワラ : 一番富がある人

ギャーナ (知識) + イシュワラ = ギャーネッシュワラ : 一番知識がある人

チャーガ (放棄) + イシュワラ = ティヤギッシュワラ : 一番放棄した人

この場合の「ティヤギッシュワラ」はシュリー・ラーマクリシュナの事。

彼は肉欲や富ばかりではなく、どんなものも蓄えることすらできなかった。

ある時、ホーリーマザーは食事の後、「パン」(ビターリーフといって食事の後のいやな臭いを消したり消化のために良いスパイスのようなもので、インド人は食後この「パン」を口にすることがある)を、シュリー・ラーマクリシュナが後で口にできるようにと、彼の服の裾を縛ってそこに入れておいた。ところがマザーの部屋から自分の部屋に帰ろうとしたシュリー・ラーマクリシュナは、なかなか自分の部屋までたどりつけず、反対方向のガンジス河の方へ行ってしまい、あやうく溺れるところだった。シュリー・ラーマクリシュナの部屋からマザーの部屋はすぐ近くなのに、パンを蓄えたという事で酔っ払いのようになって道がわからなくなったのだ。

また同じように、シャンブーマリックのガーデンハウスから帰るときの話がある。シュリー・ラーマクリシュナはよくお腹を壊していて、この時薬としてアヘンをもたらした。するとドッキネッショル寺院とそのガーデンハウスはとても近かったのに道がわからなくなって、途中で薬を蓄えたことに気が付き、持たされたアヘンを捨ててやっとなることができた。

また、ヴィヴェーカーナンダがシュリー・ラーマクリシュナの放棄を試すためベッドの中にお金を忍ばせた話もある。お金はベッドの下にあったのだが、シュリー・ラーマクリシュナはベッドに触ることもできなかった。

このように、シュリー・ラーマクリシュナの放棄は完全なもので、それは識別した放棄ではなく、もともと備わった本当の放棄だった。それは神以外すべて一時的だという意識が常にあったため、悟ったお坊さんもそこまではいかない。シュリー・ラーマクリシュナは完全に放棄しているので「Tyāgīshvara 最高に放棄した人」と言っている。

※6.anurāg : 深い愛（人にも神にも使える）。この場合「神に対する深い愛」足はその人のシンボルなので「足を愛する」というのはその人を愛するという意味。だからインドでは挨拶するときに人の足にタッチする。この場合の「足」は神様。

「あなたに対する愛を与えてください。 Give me love for you」

「私たちの愛は世俗的なものなので、神様に対する愛を与えてください」の意味。